

# テレカコレクション

< 第33回 酒編 >

健



異常だと思われる熱帯夜が続いたあとはいきなり秋に突入の感。寝苦しかった夜の睡眠不

足が解消されたのは良いが朝と夜は肌寒さを感じる。夏掛け一枚で寝ていたのが寒さで目が覚めることもあり体調管理が難しい。それでも秋は歳時記にあるように新酒、新蕎麦、新茶、新豆腐など走り物が揃う季節であり加えて実りの季節である。酒呑みにはいい季節だ。そこで今回は酒を取り上げてみることにした。

一口に酒といっても種類が多くカードも日本酒、ビール、ウイスキー、ワイン、焼酎などそれぞれでコラムを組めるほど発行されている。今回は全般的に馴染みのあるものを選んで紹介しようと思う。

### 白玉の茜にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり

この歌はよく知られているので耳にした人は多いと思う。でも若山牧水の歌というのは知っていましたか？「酒は静かに」がいいかどうか？わいわい飲みたい人もいるだろうが何事もTPOというものがある。ビールは大勢で飲むのが合っていると思うが秋はやっぱり静かにが良いようだ。

牧水は酒が大好きで旅に出ると地元の酒を探して飲むのを常としていた。ある旅行では一日平均2升5合(4.5l)の酒を飲み続けたという。しかし、あまりにも飲みすぎて肝臓が悪くなり昭和3年9月、43歳という若さで亡くなった。酒の短歌を300首余り残し酒を飲まない人からも親しまれている。

### 妻が眼を盗みて飲める酒なれば 惶てて飲み唾せ鼻ゆこぼしつ 酒ほしさまがらはすとて庭に出つ 庭草をぬくの庭草を

上の2首は酒を禁止されていた時の渴望を詠った歌だが思うように飲めない心情が伝わってくる歌だ。酒はタバコと同様、大人の文化として根付いていて映画や小説の中で重要な場面での小道具として取り上げられてきた。また酒を扱った作品や杜氏、ソムリエ、バーテンなど酒に関わる人物を主人公にした作品も多い。



例をあげると古くはサントリーのPR誌「洋酒天国」をはじめコミックでは「BAR・レモンハート」、「夏子の酒」(和久井映見主演でTV化)、「ワインの雫」、「酒のほそ道」などがあり「美味しんぼ」でも酒やワイン編をしばしば掲載している。

その中で自分が好きなのが「BAR・レモンハート」だ。



一話完結の読み切りスタイル。登場人物はレモンハートのマスターに常連のメガネさん(コートとサングラス姿のハードボイルドを気取った謎の男、店きっての飲み手)、まっちゃんこと松田記者(酒の味がわからず飲むのはウイスキーのウーロン茶割り、好奇心は旺盛のフリーライター)の三人がメイン。時にゲストの客が加わりその場の会話やゲストのエピソードにぴったりの一本をマスターがチョイスするスタイルとなっている。選んだ酒の由来とウンチク、ゲスト

の人生が融合していわゆるいい話に仕上がっている。飲めない自分が飲みたくなるいい作品だ。この作品は何度も掲載誌が廃刊になっているがリニューアルした本に鞍替えして掲載されており人気のほどがわかる。

自分は全く飲めないのだが入った会社は本当によく飲む人ばかり。取引先の人と話していると必ず言われるのが「御社の方は本当によく飲みますね」という言葉だ。会社の体質というのか、何かの記事でアルコールに関係の無い会社なのによく飲む会社ランキングで2位だったという噂を聞いたことがある。

ガス会社なので売上げを伸ばすには需要家(業界用語:お客さまのこと)件数、業務用の需要先を増やすのが主流、ガスを使ってもらうための機器の販売、保安業務にはマンパワーがかかるので人を動



かし協調と結束を高めるには酒が一番手っ取り早いということなのだろう。

入社したばかりの頃、隣の席の10年先輩の人からよく飲みに誘われた。この人は飲まない日がなく朝はいつも酒と仁丹の臭いをさせていた。コミュニケーション＝飲みニケーションというのが当時の主流だったから飲めるようにしなければという義務感というか使命感を持っていたようだ。残業していると横でずっと待っているし、いなくなったと思ったらロッカーの前で待っていた。何だかんだで週に4回ぐらいはお供した。すべてご馳走になりましたが体質に合わないことはすぐにわかった。酔う前に気持ち



悪くなってしまうのだ。意識はしっかりしているので自分でトイレに行って吐いてくるから人に迷惑は掛けないが苦しい思いはずいぶんした。結局、一向に飲めるようにならなかったのもつぱらつまみを食べていた。但しジュース・コーラ類は絶対頼まなかった。あれは何か屈辱的な感じがするからだ。見た目にも目立たないウー



ロン茶(1981年発売)は「甘い飲み物ばかりで太る」というホステスの悩みから開発されたという説があるが当時はまだ無かった。しかし考えたらその頃は未成年だったんだよな。感心したのはこの先輩「月曜日と飲んだ翌日は休むな」というのが口癖でどんなに遅くまで飲んでも翌日はちゃんと出勤していた。一日休めば仕事が増える職場だったので当然のことだったのかも知れない。しかし、3年後に異動した



職場は本社のシステムセンター。プログラムを組む仕事だったので開発期限が先で余裕があれば一日ぐらい休んでも影響がないためか飲み始めるととことん飲んで翌日は休んでしまうというのが一般・管理職を含め多かったのが所変わればと思ったものだ。ただ開発が



煮詰まってくると思わぬ要望が追加されたりして徹夜仕事になる事も多かったので酒がクッションになっていたということもある。

この頃の勤務先は東京駅に近い日本橋だったので賑わいはあったものの夜はサラリーマンが引けるとデスタウンの様だった。従って居酒屋も8時を過ぎるとラストオーダーをとりに来るので、その後は場所を変え神田、上野、新宿方面へ流れる傾向にあった。困ったことに自宅は横浜なので逆方向。うっかり付き合うと「帰らざる人」(モンローの帰らざる河のもじり)になりかねないので2件目は誘われないよう苦労しました。特に都内に暮らす人は飲み出すと帰るという感覚が無く別の意味合いでそういう人を「帰らざる人」と呼んでいました。そのかわり夜襲を受けることも多くそれなりの苦労はあったようだ。

一人で都内に住んでいた人の話。夜「今晚泊まらせてくれ」と連絡があったがなかなか来ない。大分時間がたってから来たので理由を聞くと寝床が確保できたので腰を落ち着けて飲んでいたので「信じられん！」とボヤいていました。そんな訳で飲まないわりには酒にまつわる話もいろいろありますが紙数も限られているので今後のネタとして小出しにする事にします。いつもの昭和ネタとしてはワンカップ大関、タカラの缶チューハイ、アサヒのスーパードライなどの昭和のエポック商品があるがこれらのウンチクに関しては「昭和の懐かし商品編」でネタにするつもりだ。

